

「令和5年度 九州・山口生涯現役社会推進大会 宮崎県大会」開催報告書

10月31日(火)、ホテルニューウェルシティ宮崎にて「令和5年度 九州・山口生涯現役社会推進大会 宮崎県大会」を開催した。企業の経営層や総務担当者ら、会場80名、オンライン37名が参加。各県の高年齢者雇用優良事業所に対する表彰が行われたほか、高年齢者雇用に取り組む事業主による事例発表がなされた。さらに、「夢を夢で終わらせない競泳人生」と題して、水泳のオリンピックである松田氏を育てた久世 由美子氏による講演が行われた。



1. 高年齢者雇用優良事業所表彰

九州・山口各県から高年齢者の雇用促進に先進的・積極的に取り組む企業が選定され、表彰が行われた。



今大会における表彰企業は①株式会社古賀歯車製作所(福岡)、②株式会社植松建設(佐賀)、③株式会社東洋トラスト特機(長崎)、④大共電通ネットワークス株式会社(熊本)、⑤有限会社まるみや(大分)、⑥株式会社日向屋(宮崎)、⑦社会福祉法人クオラ(鹿児島)、⑧社会福祉法人相清福祉会(山口県)の計8社であった。表彰の際は各社における取組や従業員の声が紹介され、

高年齢者の活躍する現場の様子が来場者にも共有された。

2. 事例発表 :株式会社日向屋 請関 伸氏

株式会社日向屋の代表取締役社長である請関 伸氏による高年齢者雇用の事例発表。同社が根差す門川町は人口の4分の1超を65歳以上が占めており、労働力として高年齢者を活用することが創業以来の重要なテーマとなってきた。

食品製造会社を興すにあたって、請関氏が注目したのは定年退職後の女性達が備える調理技術だった。長年にわたり家庭の胃袋を支えてきた経験を活かすため、配属を考慮するだけでなく、高年齢従業員の特性に適した作



業場を実現するため様々な工夫がなされた。床の段差や配線類をなくし、作業台や台車などの設備も、従業員の負担を軽減するべくレイアウトや規格を考慮したものを導入。健康状態を把握するためのヒアリングや記録簿の作成を行い、職員間でも声かけを通じた体調の共有を意識づけるなど、種々の取り組みによって高年齢者が働きやすい職場環境が形作られてきた。

さらに、同社では2009年の時点で早くも70歳定年制及び定年後の継続雇用制度が導入されており、ベテラン社員が長く働き続けられる環境も整備されている。高齢化が加速し多くの企業が人材不足に悩まされる今日、請関氏は高年齢者の働く環境を整えることが人材の確保につながるだけでなく、現場のパフォーマンス向上、ひいては企業全体の生産性向上に繋がるとして、成長戦略としての高年齢者雇用の重要性を強調した。

3. 事例発表:社会福祉法人スマイリングパーク 坂元 敏広氏



社会福祉法人スマイリングパークの坂元敏広氏による高年齢者雇用の事例発表。

介護・保育など福祉事業を営む同法人では、60歳以上の従業員が全従業員の25%を占めている。坂本氏は「利用者の幸せ」を実現するためにはまず「働く人の幸せ」を追求する必要があるとし、事業所における取り組みを紹介した。

まず労働条件の観点からは、定年を78歳に設定したほか週休3日を推奨するなど、ワーク・ライフ・バランスを確保しつつ長く働き続けられるようにした。また、適材適所の人員配置を徹底したうえで職務の段階ごとに研修体系を組み上げ、職員が能力を発揮できる環境を整えているとのこと。

さらに坂元氏が取り組みの目玉として挙げたのが、近年目覚ましい発展を遂げつつある各種ITツールの活用だった。

業務中の記録を音声により行える「ケアカルテ」や配膳ロボットにより、介護業務の負担が大きく軽減された。また、職員と利用者の双方が利用できる介護リフトの導入により、労働災害の一大要因となっていた介護中の転倒を大きく減少させることにも成功したという。

こうした取り組みの数々に加えて、坂元氏は高年齢従業員への「称賛」や「リスペクト」が大切であることも語った。特に同じ高年齢者を相手にする介護福祉の現場においては、若手職員にはない知識や人生経験が非常に大きな武器となる。自分たちが素晴らしい能力を持っていることを自覚してもらうことが、高年齢従業員のモチベーションを高く保ち、継続的な雇用を実現するためにも肝要であるとして、同氏は発表を締めくくった。

4. 70歳雇用推進プランナー・アドバイザー紹介

当機構では70歳雇用推進プランナー及び高年齢者雇用アドバイザーに委嘱し、企業への訪問を通じて雇用制度の改善や職場環境の整備に関する相談援助・企画立案等のサービスを提供している。

宮崎県においてはプランナー5名とアドバイザー1名が活動しており、来場者に向けて紹介を行った。



5. 特別講演「夢を夢で終わらせない競技人生」久世 由美子氏



会議の第二部では、宮崎県が誇る五輪メダリストである松田丈志氏を育てた、久世由美子氏による講演が行われた。

同氏は松田氏が幼少の時よりコーチとして指導に携わり、以降2021年に引退を迎えるまでの間、松田氏の努力と成長を誰よりも近くで支え続けてきた。

講演は松田氏がオリンピックの夢を抱き始めた少年時代から始まり、コーチと二人三

脚で練習を重ねながら、競泳選手として頭角を現していった半生が語られた。

競泳選手として数多くのメダルを手にした松田氏の競技人生はしかし、必ずしも順風満帆なものではなかったという。とりわけ3度目・4度目の五輪出場を巡っては、選手としての最盛期が過ぎていくことに対する不安や葛藤があった。それでも松田氏は諦めることなく挑戦を続け、2016年のリオ五輪・800mフリーリレーでは銅メダルを獲得。これは日本水泳史上、1964年の東京五輪以来52年ぶりの快挙となった。

加齢という誰もが直面する限界が近づく中で、それでも屈することなく世界に挑み続けた松田氏の姿は、スポーツ選手のみならずあらゆる人々に対して、人が年齢によらず夢を抱き、活躍できることを示している。

久世コーチ自身も、還暦を迎えてなお松田氏の練習を指導し続け、同氏の引退までその偉業を支え続けてきた。

久世コーチは講演の結びにあたって、「生涯現役で、夢を夢で終わらせない人生を送れば、きっと自分にとって“いい人生”になると思うんです」と来場者に呼びかけた。